

國民的感情：論説

著者	江部, 淳夫
雑誌名	龍南會雜誌
巻	146
ページ	1-2
発行年	1912-06-20
その他の言語のタイトル	國民的感情：論説
URL	http://hdl.handle.net/2298/6362

國民的感情

教授 江 部 淳 夫

三月十日。同胞が死力を盡したりし奉天大會戦の日をトしたる陸軍紀念日なり。渡鹿の兵場例に依て模擬戦を見る、遠近聲を傳へて集まる者曉來踵を接す。余會々原頭の一隅に散處す、天地の偉觀を擅にするの感あり。乃ち老女と少婢とに兒を伴うて出でしめ、余は閑窓に坐して佛蘭西大革命史を讀む、感興時を得て津々たるものあり。由來國民の血を流す利の爲にし、種族感情の爲にし、或は思想の爲にす、中に就きて凡そ其國家の生存の爲に戦ひ、同胞の幸福の爲に戦ふとき、其流るゝ血や寔に神聖にしてむしろ言を離れ、相を絶し、人間の感情も意志も將た理智も此一滴數滴に渾融す。

遮莫我等は固より是れ夕に學を講じて朝に東道を事とする平和の使徒なり。論すべきに論じ、争ふべきに争ひ、さて服すべきに服する治臣なり。然れども又是れ治に居て亂を忘れざる者。時の我等を須つものあらば、瘠せたりと雖も此腕是鐵、三尺の秋水を揮うて敵と相搏つをも辭せず、血を流して斃るゝをも顧みざる者なり。

人權の自覺か、そは已でに描かるべき一切の面目を描いて活人界を過ぎんとす、二十世紀は到底愛國の自覺に待つべきの時なりとする是れ我等が國民的感情なり。然り祖先が傳へたる一脉の熱血にして、覺醒したる世界の勇者がまた幾度か繰返したる意氣なり。

『愛國』か。之を語る者業已でに玄を探り、微を穿ちて刺す所無く、之を聽く者生れて之を聽き、長じて之

を聴きて耳遂に聾せんとす。而も今に迫んで盈ちたるに更に盛り、聾したるに更に鼓せんとす、果して什録の用意にか出づる。蓋し人各々其業に服して日夕營々たるもの、是れ正に其職分を全うする所以ならん、然れども眞に職分の精神を顯揚して男兒の面目を發揮したる者幾干かある。世人動もすれば語を『過渡』の一句に託し、流れに順うて、之に隨ふ所以の工夫を知らざるなきか。國民の自覺は己でに有りと謂ふ、試に問はん、所謂『過渡』に處して何をか自覺したる。かの甚しき者に至りては、『生活』に感ひ、『思想』に彷徨して、遂に國性剝奪力の浸潤をも省みざるに至らんとす。新しき酒を盛るに、古き革囊を以てすべからずと謂ふと雖も、かの祖先傳來の一瓢に容れたる芳醇にはまた到底西人の覬覦を容さざる好趣ありとせば、當に是れ國民性の破壊を謳ふ者、新國粹を謳ひ出でんとする者の熟々吟味すべき一事ならずや。建國の歌を朗詠して之に無限の情熱を寄するもの各國咸な是れ有り、頑固なる一面を保持して、文明と共に開化する、是れ寔に男兒の眞骨頂ならざるか、我等が最後に於て要求する幸福を將來すべき所以ならざるか。

模倣時代を出で、己でに國粹時代をも過ぎたり、天地の化育に參贊する、今の時を措いて將た何の時にか之を求めん。壞るべきを壞りて後建つべきを建つるは是れ我が祖先の遺業の精神の一にして、又國民的感情に與へられたる指針たり、かの壞りて之を建てざる遂に度すべからざらんとす。余今佛蘭西大革命史を讀んで神往の想ある時、戦は方に耐にして大砲の音地雷の響殷々我が机を撼かす、試に閉目して其狀を彷彿すれば肉亦た躍らんとす。

噫、實相を夢幻に託して書裡に没頭し、現實を理想に寄せて方丈に活目す、人生亦此樂地あり矣。國民的感情の説を作る。